

【団体名】特定非営利活動法人 KAWASAKI アーツ

事業報告書

<p>事業名</p>	<p>高校生以上を対象にした映画副音声ガイド制作入門講座</p>
<p>【計画時の事業内容】</p>	<p>【実施結果(成果)】</p>
<p>副音声ガイド制作 入門講座 4 回</p> <p>【第1回 副音声ガイド体験とガイダンス】</p> <p>1 副音声イヤホンガイド付き上映を体験鑑賞（川崎市アートセンターでの鑑賞）</p> <p>2 副音声イヤホンガイドについての座学</p> <p>3 副音声ガイドを利用して見た感想</p> <p>4 台本制作①(宿題)</p> <p>まずは自分で台本を書いてみる。</p> <p>【第2回 送迎体験と副音声台本制作】</p> <p>1 送迎体験</p> <p>リリオスから新百合ヶ丘駅間の路上で、視覚障がい者と送迎ボランティアを体験する。二人一組で、往路と復路で役割を変えて、それぞれ体験する。視覚障がい者が道路を歩くとはいくどういうことを体験し、障がいを理解する。視覚障がい者を安全に目的地まで案内するにはどのようにすればよいか、体験学習する。</p> <p>2 副音声イヤホンガイドについての座学</p> <p>視覚障がい者で副音声ガイドに長年関わってこられた方の体験談を聞く。(視覚障がい者の立場から、副音声ガイドの役割と好ましい副音声ガイドの条件とは、等)</p> <p>3 台本制作②</p> <p>各自書いてきた台本をもとに、グループ毎に副音声台本を制作。制作アドバイザーとして、バリアフリーシアター制作チームの制作スタッフがつく。</p> <p>【第3回 台本朗読】</p> <p>1 副音声朗読体験</p> <p>過去のKAWASAKI アーツ制作の映画を素材として、ライブ朗読。</p> <p>参加者による朗読体験(朗読指導あり)</p>	<p>計画時と異なるのは、①副音声台本制作の作業時間割を変更し、指導スタッフの増員(見積りより少なかったため)②費用の削減(副音声ガイド付き映画鑑賞を劇場から会議室に、ワークショップ会場を公共施設にした)の大きく2点。</p> <p>【募集要項】</p> <p>対象:高校生以上の川崎在住、または在勤の方</p> <p>受講料:無料</p> <p>募集期間:10月6日[土]～11月9日[金]</p> <p>申込方法:①氏名、②年齢、③学校・職業、④連絡先(電話番号、e-Mail)、⑤志望動機をご記入のうえ、NPO 法人KAWASAKI アーツ・映画祭事務局まで、電話またはメールで応募</p> <p>選考結果:書類審査の上、11月11日[日]にメールまたは電話で連絡</p> <p>【広報】</p> <p>上記内容で「副音声ガイド制作ワークショップ」フライヤーをカラー500部、白黒500部印刷し、川崎市内の高等学校(7校)、川崎市内のボランティアセンター(8か所)、小田急沿線の大学(6校)、神奈川県の高校演劇の大会、川崎市アートセンター、新百合21ビル等で配布した。また、当団体の主催事業であるKAWASAKIしんゆり映画祭のリーフレットにも募集要項を掲載し、市内公共施設の各所に配布した。</p> <p>【応募総数】</p> <p>20代～70代までの15名の応募があった。計画では受講生10名としていたが、選考の上、13名にて講座をスタートした。</p> <p>【第1回 副音声ガイド体験とガイダンス】</p> <p>日時:12月9日(土)13:30～17:30、場所:麻生市民館 第3会議室</p> <p>受講生:13名、技術・指導講師:3名、補助講師スタッフ:5名、事務スタッフ:1名</p> <p>1. 副音声ガイド付き上映をはじめとする、バリアフリー上映について解説(1時間)</p> <p>KAWASAKI アーツによるKAWASAKIしんゆり映画祭の20年の取り組みについて、他団体の活動も含めて、広く現状を解説し、受講生のバリアフリー上映への理解を深めた。</p> <p>2. 副音声ガイド付き上映の体験</p>

【第4回 上映とまとめ】

1 副音声イヤホンガイドについての座学
川崎市視覚障害者情報文化センターの
横浜市内のミニシアター ジャック&ベティ
での副音声ライブ朗読の取り組み等をお
話しいただく。

2 上映と副音声朗読

台本をもとに各グループの台本をライブ朗
読する。

3 体験をもとに総括

感想をヒアリング(アンケートも任意で実
施)

受講生は目を閉じた状態で映画を観た場合、副音声が付いた場合を比較体験し、視覚障がい者にとって副音声がどのように鑑賞の助けとなるかを学んだ(20分)。さらに、KAWASAKIしんゆり映画祭2018 の上映作品として、当団体が副音声台本を制作した『モリのある場所』を川崎市アートセンターでの委託上映やしんゆり映画祭で朗読を担当している当団体の講師スタッフがライブ朗読し、鑑賞した(30分)。映画のどのような部分に副音声解説が入っているかを体験した。上映後、受講生の感想や意見交換を行った(20分)。

3. 副音声ガイド制作過程の解説

実際の上映にはどのような準備が必要なのか、川崎市アートセンターでの副音声ガイド制作過程を例に紹介。

4. 副音声台本の制作練習(60分)

受講生が2 班に分かれ、副音声を考える練習をした。当法人で作成した『モリのある場所』の2シーンにどのような副音声解説を入れるか、各自考えた。資料として、副音声が入っていた部分を白抜きにした台本を配布し、その個所に受講生が各自副音声を考えた後、その副音声が適切かどうかをグループで議論し、副音声の原稿を作成した。練習制作した台本を講師スタッフがライブで朗読上映し、自分たちの制作した副音声中で映画を鑑賞した。別班の制作した上映と比較し、制作者による違いなどを感じ取った。

5. 副音声台本制作(宿題)

受講生を改めて2班に分け、1班が1本の短編映画の台本制作を開始した。資料として、撮影台本からト書きを抜いた(セリフだけが書かれた)台本を配布し、副音声を入れる箇所、長さに合わせて入れる文章などを考え、各自が最後まで副音声を考えてくることを宿題とした。

使用した短編映画は、VIPO(映像産業振興機構)の協力を得て、「ndjc:若手映画作家育成プロジェクト2014」で制作された短編『チキンズダイナマイト』『エンドローラーズ』の無料使用許諾とDVD の無料貸出を受けた。受講生には映像、台本の著作権や取扱いについて説明した上でDVD貸与と台本配布を行った。

【第2回 副音声台本制作】

日時:1月19日(土)13:30~17:30、場所:麻生市民館 第2会議室
受講生:10名、技術・指導講師:2名、補助講師スタッフ:5名、事務スタッフ:1名

『チキンズダイナマイト』『エンドローラーズ』の2班に分かれ、受講生5名に補助講師スタッフ3 名の8名で台本制作を行った。1シーン毎に受講生1 名が書いてきた副音声を読み、その副音声が適切か過不足はないかを議論し副音声を付けた。次のシーンでは次の受講生が副音声を読み、他のメンバーと議論をする形で順に台本制作を進めた。受講生はほぼ4時間、スタッフの勤める休憩もとらず、制作に没頭していた。

その日に作った部分は各自にコピーして配布し、3回で朗読体験を希望した

受講生は朗読練習、また全員に引き続き台本制作を宿題とした。

【第3回 送迎・朗読体験と台本制作】

日時:1月26日(土)13:30~17:30、場所:新百合21ホール 第2研修室等、川崎市アートセンター録音室

受講生:9名、技術・指導講師:2名、補助講師スタッフ:5名、事務スタッフ:1名

1. 視覚障がい者の送迎介助(60分)

川崎市アートセンターで副音声ガイド付き上映を行う際に視覚障がい者を新百合ヶ丘駅から劇場まで送迎する。本講座では、送迎の際に介助者が注意する点について解説した(30分)。その後、受講生が2人一組になり、順に視覚障がい者役・介助者役を担当し、介助者役の受講生が目をつむった視覚障がい者役の受講生を誘導する形で新百合21ビルの中を歩行体験した(30分)。

体験後の意見交換(15分)では、視覚障がい者としての歩行体験を通して、街のデザインや他の通行者など障がい者をとりまく環境、介助者の役割についての議論を行った。視覚を遮断した状態で街中を歩く体験で、障がい者の置かれた立場の理解が進んだ、この体験が介助をする際に役立つという意見が交わされていた。

2. 朗読体験(60分/グループ)

2班からそれぞれ2名の副音声朗読の希望者を募った。希望者は川崎アートセンター録音室に場所を移し、講師が朗読の指導を行った(希望者には前回朗読箇所を指定しており、練習を宿題とした)。副音声朗読ではどのようなことに気を付けるかを講師が30分ずつの指導をおこなった。2名のうち、一名を次回のライブ朗読の担当者として、副音声として効きやすい朗読、読み始めるタイミングなどの練習を各自の宿題とした。

3. 台本制作(120分)

朗読を希望しなかったほかの受講生は、引き続き台本制作を行った。当初の予定では、第3回の終わりの時点で短編を最後まで制作するのが目標だったが、両班とも2/3程度までで制作しかできなかった。

2班のうち1班では、受講生の半数が所用で抜けたため、制作に必要なディスカッションの人数確保ができなかった。また、参加率が高かったグループにおいてもディスカッションを深める時間が足りなかった。副音声上映の各課程を広く体験できるようなカリキュラムを考えたため、30分の短編を完成させる時間割としては不十分だった。

4. 川崎市アートセンター録音室見学(30分)

朗読に参加しなかった受講生も川崎市アートセンター録音室の見学を行った。

【第4回 副音声ガイドライブ上映】

日時:2月2日(土)13:30~17:30、場所:新百合21ホール 第2研修室

受講生:8名、技術・指導講師:4名、補助講師スタッフ:5名、事務スタッフ:2名

1. 中途失明視覚障がい者の武村桂子さん講演(60分)

1997年のKAWASAKI しんゆり映画祭でのバリアフリー上映のアイデアを出し、その後、数年間台本制作にも関わられた武村さんに、当法人のバリアフリーシアター代表滝沢がインタビューし、当時の制作話やご自身の障がいについてお聞きした。受講生のアンケートからは武村さんに直接お話を伺えたことについて貴重な体験で勉強になったという感想が寄せられた。

2. 短編映画副音声ガイド付き上映(30分/グループ)

受講生がグループで制作した副音声台本を希望者1名がライブ朗読し、上映を行った。朗読担当した受講生は、第3回で朗読指導を受けた後、各自自宅で練習を行って当日に臨んだ。

3. 武村さんより講評・受講生の質問(30分)

武村さんから受講生が制作した台本の表現の不適切どころ、工夫がほしいところなど、朗読についても読み方、読むタイミングについて細やかな指摘があった。一度制作したうえで初見の武村さんより率直かつ厳しいご指摘をいただくことで、受講生にはたくさんの気づきがあった。受講生から武村さんに対しても、制作の途中で感じたことや質問がたくさんでた。

4. ワークショップのふりかえり(アンケート記入とフリートーク)(30分)

受講生からは、副音声を作ってみて大変さがわかった、益々興味がわいたという感想や短編の最後まで完成させられなかったことについて残念、もっと制作する時間が欲しかったという制作に対する熱意のある意見が多かった。

このことから、アンケートで台本制作についての満足度の解答が、満足度がほかの回よりやや低い傾向があったが、1シーンの1副音声にかかる時間や、議論の深さを求める意欲と分析した。

5. 当法人の活動紹介(30分)

2/9に川崎市アートセンターで行う日本語吹き替え収録の見学の案内。川崎市アートセンターでの副音声ガイド委託制作の今後のスケジュール。活動を紹介したブログ、Twitterの紹介

結果として、受講生8名のうち5名は日本語吹き替え収録の見学にやってきた。このうち2名が次の委託制作より、副音声ガイド制作活動に参加することとなった。

【計画時の事業の実施効果】

視覚障がい者の方が、TV や映画、演劇を鑑賞するためには、副音声ガイドは欠かせないが、健常者には副音声ガイドの存在を知らない人も多い。

入門講座を行い、視覚障がい者の疑似体験をし、視覚障がい者の立場で文化を享受するとはどういうことかを考える機会を創出することで、視覚障がい者の障がいへの理解を深めることができる。

また、視覚障がい者を取り巻く文化環境・現状を知り、社会や地域の課題発見につなげることができる。

講座を体験することで、副音声ガイドの必要性を認識してもらい、制作に興味を持ってもらう。

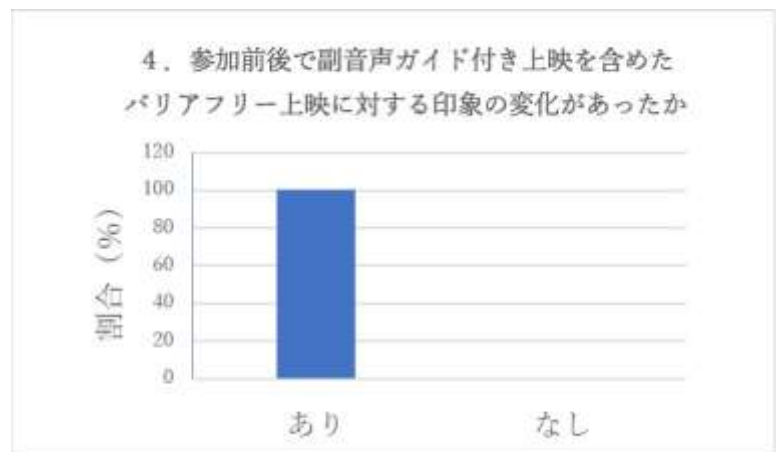
今後のガイド制作活動へのボランティア参加を促すことで、次世代の人材の確保につながる。

更に、これをきっかけに障がい者と共に生きる・暮らす社会をデザインするとはどういうことか、考える契機づくりにつながる。ひいては、若者が進路を考える際に福祉関連が選択肢に挙がるようになり、社会のバリアフリー化を支える担い手をつくることにつながるきっかけづくりとなる。

【実際の効果と課題】

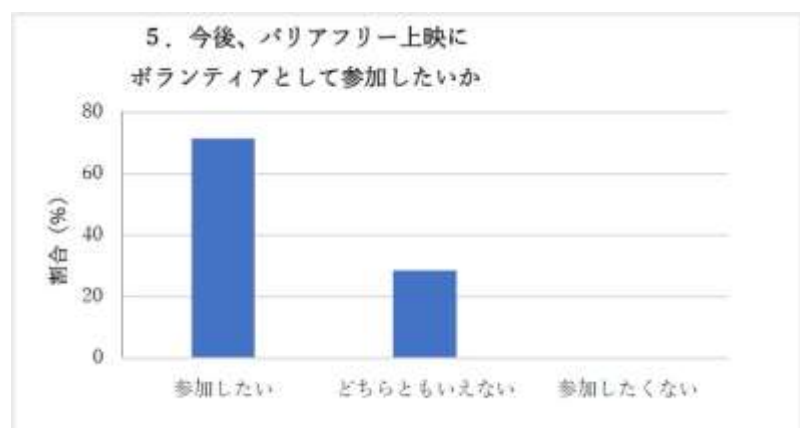
【効果】

受講生に行ったアンケートでは、全員が「ワークショップに参加したことにより、バリアフリー上映に対する印象が変わった」という結果を得た。もともと興味があり、ある程度の知識を持って参加した 13 名のうち、最後まで受講した人数は 10 名（3 名は家族の病気、学業のカリキュラムの都合により途中で参加を断念した）。このうち、アンケートに回答した 8 名は、副音声ガイド対上映をふくむバリアフリー上映に理解をより深める結果となった。



また、アンケート回答者の 60%が、「今後バリアフリー上映にボランティアとして参加したい」と回答をした（このうち 2 名は当団体の活動に加入することとなった）。どちらともいえないと答えた人は、興味はあるのだが、参加できない理由として仕事や他の活動の時間的な問題を挙げていた。

今後ワークショップを行うことは人材確保に必要不可欠であり、定期的開催していくことが望ましい。



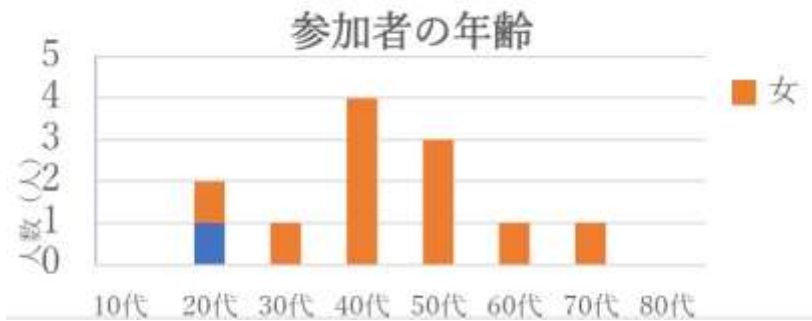
【課題】

このワークショップは、高校生以上を対象とした。10代～20代の若い世代に興味を持ってもらい、ボランティアに参加してほしいという狙いがあったので、川崎市内の高校や川崎市にある大学に向けて募集チラシを配布した。一方で、しんゆり映画祭のリーフレットへの掲載、川崎市アートセンターや市内の公共館、ボランティアセンターへのチラシの設置を行い、映画、またはボランティア活動に興味を持った人にも募集を行った。参加者の年代の分布をみると、およそ 6 割が 40 代以上であり、応募

動機から映画に興味がある人が半数、ボランティア活動に興味がある人が半数という結果を得た。

この結果から、10代～20代の募集方法の改善が必要であり、学校への個別呼びかけへ切り替えたり、開催方法(大学・高校内部への出張開催にするなど)の工夫したりすることが必要であると考えた。

活動を通じて、ワークショップ受講生の30代、40代、50代に熱意の高い人が多いと感じられた。バリアフリー上映活動の持続可能性を考えるには、必ずしも学生をターゲットとする必要はなく、年代に関わらず、多くの人が参加することが望ましいと考えた。



男女比を見ると圧倒的に男性が少ない。また、ボランティア参加を希望する人においても、仕事、子育て、他のボランティア活動などで忙しいという回答が多かったことから、活動の全てに参加できる人材を求めるのではなく、送迎支援、台本制作、副音声朗読、日本語吹替といった一部分のみ、短時間だけでも参加可能な人材を広く集めることを考えていくなど、募集形態の転換も必要であると感じた。